

岩手・宮城内陸地震義援金贈呈報告

「宮城県臨床検査技師会」

今回の地震の復興支援のため全国の技師会から多くの義援金をいただきありがとうございます。12月22日に宮臨技が代表して立花会長、橋本副会長、佐藤広報部長の3名が、震源地にあたる宮城県栗原市へ義援金を贈呈してきましたので報告致します。

まず栗原中央病院を訪問しました。病院長、事務局長、医療局長、そして千葉副技師長が対応して下さり、地震当時の病院の様子を伺うことができました。病院の外壁はガラス面が多い構造でしたが、免震構造のため一枚も割れなかったということでした。しかし建物と駐車場のアスファルトの間に4cmほどの段差ができており地震の規模の大きさを感じました。その後、栗原市役所を訪問し副市長に義援金を贈呈しました。被災地の復興の様子を行政側から聞くことができましたが、被災した人



橋本副会長、立花会長、柳川副市長

たちは高齢者が多く、いろいろな面で今後のことを決めるのが難しいことやマスコミの報道が象徴的な部分を大きく取り上げすぎているなど興味深い話を聞くことができました。12月22日は小雪が舞うほどの寒さでした。被災

地においては、未だに10名の方々の行方が不明になっており、多くの住民が未だに自宅に戻れず、仮設住宅に身を寄せております。一日も早く復興されることを願い、会員の皆様方から頂戴した見舞金を手渡して参りました。この度の義援金活動にご賛同いただきました会員の皆様に心より感謝申し上げます、謹んでご報告申し上げます。【佐藤寿夫】

「岩手県臨床衛生検査技師会」

平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震の義援金150万円は昨年12月22日(月)に岩手県臨床衛生検査技師会会長、副会長、事務局長の3名が岩手県一関市と奥州市の市役所に直接赴き、各々に75万円を贈呈したことを報告致します。

一関市では浅井東兵衛市長に、奥州市では伊藤正次収入役に直接義援金をお渡ししました(写真)。その時に被災地域では山間部の道路被害が余りにも大きく整備、復興にまだまだ時間が掛かるとのお話や観光では風評被害が大きく影響しており、更に経済不況が覆い被さるなど経済面でも大変ご苦労をされている話をお聞きしました。

しかし両市とも「本当にありがたく頂きます。復興のために役立させて頂きます」と何度も御礼のことばを述べていたのが印象的でした。

そして早い復興と被害に遭われた方々のご健勝を祈りながら市役所を後にしました。

【伊藤茂雄】



伊藤会長、安保副会長、行森事務局長、浅井一関市長

中日新聞・東京新聞
毎金曜日照刊に連載中!

「検査のはなし」

12月12日掲載

第6回 <歴史②> 鎖国の日本に大きな遅れ

古代ギリシャに端を発した臨床検査は、18世紀に入って飛躍的な発展を遂げます。尿に関していえば、尿蛋白の存在をイタリアのコツノが明らかにしました。さらに、尿中の尿素の発見、尿糖の検出、痛風患者からの尿酸測定と続きました。いずれも1770年前後から10年ほどの間に西欧で起きた進歩です。

しかし、鎖国状態だった日本は、大きな遅れを取りました。臨床検査について日本で初めて出された専門書は、1815(文化12)年の「因液發備(いんえきはつび)」。蘭方医・吉雄耕牛の遺筆として上梓されました。ここでも西欧の新しい動きは伝えられておらず、体液(尿、汗、だ液など)を外見的に見る検査法など、中世の考え方が中心になっています。

50年もの遅れを取りつつも、西洋医学は少しずつ日本に入ってきました。この時代の書物には、西欧での顕微鏡の医学への応用や血球、精子についての記述もみられます。1859(安政6)年に思想家・佐久間象山が知人にあてた手紙によれば、この時代に少数の医師が検尿を行っていたようです。日本における臨床検査の発展は、明治期を待つこととなります。

12月19日掲載

第7回 <歴史③> 明治の疫病大流行で注目

明治新政府は、江戸時代の蘭学一辺倒の姿勢を改め、広く西洋医学の受け入れを図りました。当時の世界に冠たるドイツ医学を採用、医学校、大学の拡充をめざしました。臨床検査の分野でも、多くの新しい知識が入ってきました。

1880(明治13)年6月に学術誌の「中外医事新報」に掲載された「血球ノ説」は、日本の血球数算定法の草分けと言えます。その2年後に出版された医学者・足立寛の講述録「顕微鏡検査指針」には、病理組織を検査するための切片の作り方、染色の手法が記されています。明治期に、臨床検査技術者が注目されるようになった背景には、疫病の大流行が挙げられます。

1879年にはコレラの大流行で、死者が10万人を超えました。93年には、天然痘により約1万1千人、赤痢により約4万1千人が亡くなり、翌九四年にも赤痢で3万8千人余りの死者が出ました。発疹チフスやペストも流行しました。

新しい教育を受けた医師、看護師らが、避病院(明治時代の伝染病専門病院)などで治療に奔走しました。そして、医師以外にも細菌検査をできる技術者の需要が高まり、現在の臨床検査技師の原形ができていったのです。

12月26日掲載

第8回 <歴史④> 教育は戦後から

明治時代の疫病の流行は検査技術者の需要を高め、それぞれの施設が個々に技術者を養成する体制が以後、長く続きました。旧陸軍・海軍の病院でも、病理試験室で勤務する人材が養成されていました。

終戦後は、軍で養成された技術者が、病院の臨床検査室、衛生研究所、保健所などで実務をする傍ら、養成も担当しました。1949(昭和24)年、東京の国立東京療養所が、作業病棟の結核回復者を臨床検査室に実習生として通わせたことから、東京清瀬医学専門学校へと発展。⇒